20231015　朝礼拝　使徒言行録１章 1～5 節

「下敷きと丁寧な字」

私は、字を書くのが苦手です。苦手を通り越して、苦痛と感じることもあります。どんなに思い込めて書いても、どんなに願いを乗せて書いても、少し書き間違えてしまうと、それはダメな文章になってしまう。私にとって手書きの文章は、不寛容な印象が強いですね。ちょっとの間違いでも価値が失われてしまうもの、自分の思いが否定されてしまうもの、そんな感じがします。だから、実を言うと、同志社大学神学部を志望したのも、「字を書くのが嫌だったから」という動機がありました。同志社大学神学部は、当時数少ない「手書きじゃない願書」を受け入れてくれるところでした。今は、どうなのか知りませんが、私が大学入学を志した頃は、願書や志望理由書は、「書かれた文字の雰囲気から人となりが分かる」という理由で手書きのところがほとんどでした。そんな中、同志社大学神学部は電子化された願書や志望理由書に、パソコンで打ち込んで提出することを認めていたんですね。後で聞くと、どうやら、その方針の背景には、敦賀教会もお世話になった関谷直人教授の意向が働いていたようでした。関谷教授は、学生時代に「初めて手書きじゃない印刷された論文を提出した人」だったそうです。世界で初めて機械で印刷された書物は「聖書」でした。ヨハネス・グーテンベルクという技術者と、ヨハン・フストという実業家が手掛けた「グーテンベルグの聖書」が、世界初の印刷物でした。少々、大げさな言い方ですが、そんな世界初の印刷物である聖書を尊ぶ同志社大学神学部が、他大学に先んじて「印刷された願書」を受け入れていたというのは、なかなか格好良いなと思います。そして、関谷教授には、「お陰で大学に入れました、ありがとうございます」と思っています。

しかし、今は、手書きの有難みも分かるようになってきました。少しの書き間違いも許されないからこその尊さがあるんだろうな、と。パソコンのキーボードで文字を打ち込み、プリンターのインクで印字される画一的な文字と、少々崩れて、にじんで、時々書き直しの後も見られるような手書きの文字と、それぞれ違った利点と味わいがあると今では思います。ちょうど明日、石川県から転園してくる園児が１名いるのですが、この子が前にいた園は、うちと同じキリスト教保育連盟の幼稚園でした。その幼稚園から転園に必要な「在園証明書」が届きました。単なる事務手続きに過ぎない、この書類には、二枚の便せんが添えられていました。便せんには手書きの文字で「転園先が、同じキリスト教の幼稚園で安心しました。よろしくお願い致します」と書かれていました。もしも、この便せんのメッセージが、たとえ同じ文言だったとしても、印刷されたものだったなら、

その感動は半減していたと思います。手書きだからこそ伝わる思いは確かにあるよね、と感じられる、そんな出来事でした。

話はさらに遡りまして、文字を学び始めた小学生の頃、「下敷き」というものが不思議でした。ただでさえ文字を書くのが嫌いなのに、さっさと終わらせてしまいたいのに、「まずは文字を書くページの下に、下敷きを敷くこと」と言われて、「いや、別に敷かんでも書けるがな」と思ったものです。小学校の時の筆記用具は、2BかHBの鉛筆でした。シャープペンシルやボールペンは使えず、比較的濃く太い字の書ける鉛筆しか使えませんでした。となると、下敷きを使わずにノートに字を書いていると、裏写りしてくるんですね。ある時、「あぁ、だから、下敷きを使うのか」とその意味を再確認したのを憶えています。あと、字を書くには、下地が適度に固い方が良いことも分かるようになってきました。「なるほど、下敷きって大切なんだな」と。今は、良いのか悪いのか、あまり紙の重なったノートというものに文字を書くことがないので、下敷きを使う機会もありません。でも、地味だけど下敷きって大事ということだけは感じています。

で、なんで、こんな話をしているのか、と言いますと。ずっと思い出話になってしまいそうですが、要するに「下敷きって大事」ということです。文字を書くにしても、あと、主の御言葉を宣べ伝えるにしても、です。

今日の聖書箇所である使徒言行録は、今の私たちの信仰生活に続く、「異邦人伝道」を伝えている書物になります。最初、福音書においてはイスラエルという限られた地域にのみ伝播されていた福音が、使徒たちそれぞれの働きを通して、世界中に広がっていったことが使徒言行録には書かれています。使徒言行録における数々の働きがなければ、ここに敦賀教会が建つことも、幼稚園が始まることもなったでしょう。私たち一人一人にとって、その信仰の始まりは、それぞれの信仰告白、それぞれのお世話になった牧師先生、それぞれの親しみある先輩信徒の方たちだと思います。聖書のみに、その信仰の始まりを持つ人は、たぶん少ないと思います。聖書という本は、私たちにとって信仰の指針や啓蒙書ではあっても、聖書に書かれた出来事と、自分の生きている現在とを結びつけて考えることは、ちょっと難しいかも知れません。あまりに長い系図を見せられて、数千年前のご先祖様と自分という存在とを結びつけて考えることが難しいようなものです。古すぎる伝承は、容易に神話や伝説の類と見なされてしまいます。私たち信仰者も、聖書を学べば学ぶほど、知れば知るほど、どこまでが史実で、どこからが伝説なのか。よく分からなくなることがあります。2000年という時間、日本と中東地域という距離、あと翻訳されただけでは越えられない言葉と文化の壁。他に類を見ないほどに古い書物を、毎日毎週読んでいること自体が珍しく、特異なことだと言えま

す。聖書ほどの古い書物は、通常、博物館や大学の書庫の中で埃を被って保管されているものです。こんなにも増刷され、世界中に行き渡っている聖書という古文書は、それだけで奇跡だと言えます。

そんな奇跡の古文書を今日も開いて読んでいる私たちですが、あえて当たり前のことを言うなら、この聖書って、私たちの信仰の下敷きなんですよね。この聖書に書かれている通りには、今の世の中、生きてはいけません。時代的な違い、文化的な違いは認めないといけません。聖書は手引書にはなりません。しかし、そうした障壁を越えて、私たちは、私たちの教会と幼稚園とに歴史的に繋がっている聖書から学び、教えられ、今日を生きています。虚構ではなく、創作でもなく、かつて本当にあったイエス様の御言葉と御業、そして使徒たちの福音宣教。そうした下敷きがあって、私たちは今、ここで2000年経っても止めることなく、御言葉を聞き、御業を振り返り、福音を宣べ伝えるために礼拝をしています。

そして、私たちは、この使徒言行録を書いた福音書記者のルカと同じように、また、使徒言行録に登場する使徒たちと同じように、今、ここ敦賀で福音の文字を書き記しています。文字通り、「字」を書いている場合もあれば、その他の方法で書き残すということを続けています。例えば教会誌編纂委員会の働きは、使徒言行録の続きを「字」として書いているようなものです。ここ敦賀で、誰が何をして、何がどうなって、教会が建ち、幼稚園が始まり、そして、これから先、どんな展望を見ているのか。それはまるで、使徒言行録が、ペトロを始めとした使徒たちの活躍を伝え、そして、パウロが念願だったローマに渡った先でどんな活躍をしていたのか、ということを伝えているのと同じです。使徒言行録の最後、28章30節～31節には、こう書かれています。「パウロは、自費で借りた家に丸二年住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」と。これって、そのまま教会の働きですよね。私たち敦賀教会が、ここ敦賀の街で続けていることと同じです。教会詩編纂委員会は、「訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続け」ている敦賀教会の歴史を書き記す働きを行っています。また、私たち一人一人も、それぞれのご家庭で、それぞれの職場で、決して大胆に深く刻み付けることはないにしても、福音の文字を記していると思います。ちょっとした配慮によって、些細な親切を通して、あるいは歓迎や祝福の気持ちによって、ちゃんと福音を刻んでいます。中には、俳句や川柳、短歌という形で、本当に文字として福音を書いている人もいらっしゃるかと思います。

しかし、それらの文字は、必ずしも美麗であったり、雅であったりではないかも知れません。誰かに褒められるような美しい文字ばかりではないでしょう。書き損じることもあれば、書いたこと

を後悔する、そんな宣教もあるかと思います。でも、ちゃんと、「聖書」と言う下敷きを敷き、神様とイエス様を心に迎えて書き残す福音の文字は、少なくとも「丁寧な字」ではあると思います。使徒言行録において、主の福音のために尽力した使徒たちも、決して美しい福音を書き残す宣教者ではありませんでした。喧嘩をしたり、衝突したり、弱さを憶えたり、逃げ回ったり。まぁ、色々とありました。でも、一生懸命にイエス様のことを伝えるために努力し、奔走していました。御言葉と言う下敷きを敷いて、その上に丁寧な福音を書き記してきました。

私は手書きの文字が苦手ですが、でも、福音を宣べ伝えるという作業は、手書きのようなものです。パソコンに打ち込んで、プリンターで印刷してというデジタルで手軽な方法はありません。信仰の継承も、新来会者を迎えるということも、結局は、アナログで時間のかかる営みです。でも、聖書と言う下敷きがあれば、御言葉と言う下敷きがあれば、私たちは、時間がかかっても丁寧な福音を宣べ伝えることができます。逆に言えば、そういう下敷きを面倒くさがって怠けてしまうと、やっぱり上手くいかないと思います。この辺りの信仰理解は、有名なこの聖句と繋げて考えることもできるでしょう。コリンとの信徒への手紙一 13 章 1～3 節です。「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない」。

当たり前のことですが、大切なことです。聖書を読んで、御言葉を聞いて、そして、そこに記されている愛の教えをちゃんと受け止めて、宣べ伝えて行く。しっかりと御言葉を下敷きにして、愛情を込めた言葉や行いを、丁寧にこの社会に刻んでいく。そんな信仰の歩みを今週も続けて参りたいと願うものであります。

神様。今日も私たちのために尊い安息日を備えてくださり、ありがとうございます。かつて、あなたは御子イエス・キリストのもとに使徒たちを与えて、広く世界に福音を述べ伝える御業を示されました。今日においても、あなたは、私たち一人一人に信仰を与えて、礼拝や祈りの場に招き入れてくださり、古の使徒たちと同様に支え、導いてくださいます。私たちは、あなたが語られた御言葉を下敷きとして、それぞれの場所で丁寧に福音の文字を書き記して参りたいと願います。決して綺麗に書けることばかりではありませんが、どうか、私たちに拙いなりに丁寧な宣教の業が、あなたによって祝福され、大きな実りへと繋がることができますように。

この祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。